

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）  
分担研究年次報告書

稀少てんかんに関する調査研究

研究分担者 松尾 健 東京都立神経病院 医長

研究要旨

本研究の前身である「稀少難治性てんかんのレジストリ構築による総合的研究」で登録された症例のうち、異形成性腫瘍による症例の割合、経過、施された治療、今後加えるべき調査項目等につき検討を行った。

A. 研究目的

本分担研究は、異形成性腫瘍に伴う稀少難治性てんかんの症例登録、追跡調査を行い、発症年齢や病態、治療反応性、死亡に関する情報を収集すると共に、得られたデータをもとに広く情報提供し、最適な治療の選択に結びつけることを目的とする。

B. 研究方法

本分担研究では、異形成性腫瘍に伴うてんかん症例を対象とし、疾患登録と観察研究を行った。疾患登録からは疾患分類別の患者数と死亡率の推定を行った。観察研究のうち横断研究では患者の病態および罹病期間を把握し、縦断研究では疾患登録後2年間にわたり病態の追跡を行った。

C. 研究結果

稀少難治性てんかんのなかでも、異形成性腫瘍に伴うてんかんは手術による発作消失率が80-90%と言われており、比較的良好な外科治療転帰が望める。過去の報告からも、病変の完全切除により良好な発作転帰が得られることが示されている。本研究で集積したデータでも過去の報告との間に大

きな乖離は認めなかった。

D. 考察

異形成性腫瘍は神経節膠腫と胚芽異形成性神経上皮腫瘍が大半を占めるが、それ以外に明確な病理分類が困難な症例も存在する。一方で、低悪性度のてんかん原性腫瘍をLEAT (low grade epilepsy associated tumor) としてまとめて取り扱う概念もある。異形成性腫瘍は全脳腫瘍の2-5%程度と症例数が少ないため、細分化せずにLEATという括りで扱うことで発作予後予測に関する新たな知見がられる可能性があると考えられる。4%との報告もある術後の年間再発率をより下げするためには、病変の摘出率以外に発作転帰に影響する要因の検索、分子生物学的な情報収集が今後の課題であると考えられる。

E. 結論

異形成性腫瘍に起因する稀少てんかん症例につき、特に外科治療の発作転帰予測因子につき検討を行った。

F. 健康危険情報  
なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

1) Miyakawa N, Majima K, Sawahata H, Kawasaki K, Matsuo T, Kotake N, et al: Heterogeneous Redistribution of Facial Subcategory Information Within and Outside the Face-Selective Domain in Primate Inferior Temporal Cortex. Cereb Cortex, 2018

2) 松尾 健、川合 謙介 迷走神経刺激療法 Clinical Neuroscience Vol.35 no.7

866-868, 2017年7月

3) 松尾 健 てんかんの外科治療と看護-迷走神経刺激術 ブレインナーシング vol.33 no.12 51-55, 2017年12月

2. 学会発表

1) 医工連携による高密度皮質脳波の可能性 - 基礎実験での検証。日本てんかん外科学会 2018.1.18

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

なし